
緋弾のエリア ~ 薬物科の武偵 ~

緋村 梢

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

緋弾のアリア〜薬物科の武偵〜

【Nコード】

N4352Z

【作者名】

緋村 梢

【あらすじ】

東京武偵高校に新たに増設された学科<薬物科^{メデイシン}>。

元々、国家試験である薬物取扱者資格を取得できる<東京薬物専門高校>という高校があった。

だが、少子化による生徒減少により経営が困難となり、国立である武偵高と統合することとなった。

薬専高に通っていた<姫神^{ひめがみ} 薫^{かおる}>(17)もまた例外ではない。

薫の所得済みの資格は危険物取扱全種、薬剤師、有機溶剤作業主任者、麻薬取扱者、毒物劇物取扱責任者等を所有している。

というか、学校が強制で取らせるのだが……。
そんな普通の高校生活からかなりかけ離れた薫は、これからもっと普通の高校生からかけ離れるとは、夢にも思っていなかった……。

<作者メッセージ>

こんにちは、私は国語力・文章力などの小説に必要な要素が欠けています。

ですが、私は自分のできる限りの力を出し切って書きたいと思うので、目を瞑ってください。

1 弾 Prologue

とある日、俺は引越し屋のトラックに揺られながら、眠っていた。

今年から俺は東京武偵高校に新設された学科・・・<薬物科メデイシン>に所属することになった。

そうなった理由は、少子化により 全校生徒数が800人から一気に290人に減ったからだ。

それもそのはず、今年入る予定の一年生は、18人で、今年卒業したのは、500人、在校生はたった290・・・。

それに新入生を足しても、308人・・・。

少なすぎる・・・。

それに、今在校している生徒には海外の研究機関に行く者もいる。

その為、大体在校生は200人居るかいなか・・・。

3年は120人、2年は俺を含め、62人、1年は18人となった。

その為、経済的な余裕がなくなって、廃校となった・・・。

だが、武偵局の計らいで、武偵高と統合するとなった・・・。

さすが、校長の人脈・・・。

その人脈を生徒集めには役立てんのかね……。

俺はそう考えていた。

すると、トラックは停まった。

「着いたぞ、ガキ」

「見りゃわかるって……」

俺はそう呟いて、トラックから降りた。

しかし……、薬専校の寮よりきれいだな……。

「おら！さっさと運べよ！」

ちまちまうるせい奴だな……。

「分かってるって……」

俺は渋々、荷物を運ぶ。

運ぶと言っても、アタッシュケース×8と実験用具セット、白衣と私服だ。

そんなに数は無いが、アタッシュケースは一つ10kgある。

俺はそんなアタッシュケースを4つ同時に持って、今日から住まう部屋に運んだ。

部屋は遠山っていう人の隣だ。

すべての荷物を運び終え、運送業の男性を見送りに、外に出た。

「んじゃあ、達者で暮らせよ」

「言われなくても分かってますって・・・」

「しかしまあ・・・、なんでお前は行かなかったんだ？」

「何にだよ？」

「寮だよ、寮。折角、校長が学校の土地を売り払って、買ってくれたんだからよ。ちったあ校長の恩も着ろよな」

「んなこといったら、校長に迷惑掛けっ放しになんだろ・・・」

「そうだな・・・」

「また何かあったら連絡するよ」

俺がそういうと、男性は「おう」と言って去って行った。

さてと、俺も部屋の片づけするかな・・・。

俺はそう考え、部屋に戻った。

部屋に戻り、俺はアタッシユケースをクローゼットに入れた。

そして、ある程度、部屋を片付けたあと、チャイムが鳴った。

俺は時計を見た。

時刻はPM1:29を回っていた。

確か武偵高説明会はPM2:30からであったよつな気がする。

てことは、恐らく……

俺はそう考えつつ、玄関を開けた。

そこには、セーラー姿の少女が居た。

「よう、春風。何の用だ？」

「おっつゝ。今日は薫が来る日って聞いてたから、来てみたの。そしてついでに、いっしょに武偵高に行かない？」

「別にいいぞ。すぐ着替えるから待ってる」

俺はそう言い残し、リビングで着替えを済ませ、学ランを着る。

東京薬物専門学校は学ランである。

女子はセーラー服。

まあ、これを着るのは今日が最後だろう。

説明会の時に制服の採寸もするって言ってるしな……。

そして、俺は玄関に出て、春風と共に武偵高に向かった。

武偵高に到着し、体育館に入った。

すでにほとんどの生徒が集まっていた。

俺は自分の学年のところの椅子に座った。

周りの奴はみんな顔見知りだ。

といっても、当たり前なことなのだが……。

そして、説明が始まった。

この武偵高では、<薬物科^{メドサイン}>は、衛生学部になるらしい。

薬物高では、全員が薬剤師の資格を取得しているため、納得できるのだが、劇毒物を扱う奴は少し頭を捻るだろう。

まあ、俺はどうでもいいんだが……。

その後、制服の採寸をして、設備説明を受けた。

その途中・・・・・・・・迷った・・・・・・・・。

俺と春風、それに俺の親友である、倉木雪弥くろぎ ゆきや（17）、春風の親友である、姫川ひめがわ（ひめがわ）愛美あゆみ（17）・・・・・・・・。

「なんで迷ったんだ？薫」

「なんでだろうな・・・・・・・・、雪弥」

「そんなの決まってるじゃない・・・・・・・・」

「これはもちろん・・・・・・・・」

「「「雪弥が興味本位で廻り過ぎ！！」」」

俺と春風、愛美はハモった。

「全部俺のせいだよ！！！」

「「「それしかねえだろ！」」」

俺達がそういうと、雪弥はしょぼんとした。

「さてと、これからどうするの？薫」

「感でいくしかねえだろ・・・・・・・・」

俺は適当に、歩く。

すると、クロロベンゼンの香りがした。

恐らく、^{メデイシン}薬物科の学科塔が近いのだろう。

俺はそう考え、香りを辿った……。

1弾 Prologue (後書き)

ひめがみ かおる
姫神 薫 (17)

髪：漆黒のナチュラルスイングショート

眼色：ダークブルー

身長：172cm

所属：薬物科2年

はるかぜ しほ
春風 詩穂 (17)

髪：漆黒のロングヘア

眼色：エメラルドグリーン

身長：155cm B：B70

メティン
所属：薬物科

くまのゆき
倉木 雪弥 (17)

髪型：濃い茶色のマッシュウルフカット

眼色：ダークグリーン

身長：170cm

メティン
所属：薬物科

ひめかわ あゆみ
姫川 愛美 (17)

髪型：黒色のセミロングのストレート

眼色：ダークブルー

身長：153cm B：A60

メティン
所属：薬物科

2弾 Second Prologue

香りを辿ると、「KEEP OUT」「HAZARD AREA」と書かれたテープで仕切られている建物に到着した。

その建物の付近には防護服を着た人が10名ほど居た。

入口のあたりに、有毒を記す絵が描かれたトラックが一台居た。

そのトラックの荷台から、防護服を着て、フォークリフトを運転している人が、何かを運び出した。

「ありやなんだ？」

「薬物科なら自分で考える」

俺は雪弥が聞いてきたため、そう返す。

目を凝らして、トラックに書かれた文字を見た。

そこには<トリクロルエチレン>と書かれていた。

「……さっさとここから離れるぞ」

俺は振り返り、その場を離れた

「お、おい！」

雪弥は慌ててついてきた。

もちろん、春風と愛美もついてくる。

「一体どうしたの？薫」

「お前も自分で考えろ」

「ケチくさいな、教えてよ」

俺は立ち止り、振り向く。

「仕方ねえな……。ありゃトリクロルエチレンだ。それも高濃度のな」

俺がそういうと、3人は驚いた表情をする。

「おいおい……。なんでそんなもんがあんだよ……。？」

「俺が知るか。恐らく、劇毒物取扱関係だろ。それより、早く合流しないと……」

俺は携帯を取り出す。

すると、3件ほど着信があった。

「風宮からだ」

「風宮から？なんでお前が風宮の携番知ってんだよ？」

「別にいいだろ。それより、電話してみないと……」

俺は風宮に電話をかける。

『おーやっとな繋がった。お前らどこに居んだよ?』

「悪い、恐らく薬物科塔から西に500mのところだと思っメデイシン」

『もう薬物科塔メデイシンに行ったのか!?』

「ああ。お前らも行っただろ?」

『それがよ、今は立ち入り禁止らしいんだ。なんか劇薬を納庫して
るらしくてな』

「それなら見たぞ」

『本当か!?!で、薬品はなんだ?』

「トリクロルエチレンだ。それも高濃度のな」

『おいおい……マジかよ……。お前らよくそんなところ行けた
な……。もし俺がお前らだったら
逃げ出すっての……。』

「俺達も逃げてきたところなんだよ。高濃度のトリクロルエチレン
つつつたら、毒分類だからな。それよりお前らどこいんだよ?そっ
ちと合流すつからよ」

『ああ、ここは確か……。強襲科実習場……。次は救護科
の学アンビュラス

科塔に行く予定だ』

「分かった。なら俺達は救護科アンビュラスの学科塔に直接向かう。案内人には伝えといてくれ」

『了解。んじゃあな』

そう言って、風宮は通話を切った。

「さてと・・・」

俺はポケットから地図を取り出し、開く。

今俺達が居るところから救護科アンビュラスの学科塔まではそれほど離れては居ない。

「んじゃあ行くか」

「じゃあ俺が先頭を・・・」

雪弥がそういうと、空気が重くなった。

「・・・やっぱ薫が先頭でしょ」

「そうだね」

「おい・・・なんで俺じゃダメなんだよ・・・?」

「デジャブを見たからよ」

春風がそついうと、愛美が相槌を打った。

「んなことどうでもいいからさっさとあいつらと合流するぞ」

俺はそう言っつて、歩き始めた。

数分後、俺達は救護科学科塔アンビュラスに到着した。

「まだあいつ等は来てないっか・・・」

「まああいつらが先に来れるって保証はねえし。それに、あいつらは強襲科アサルトの学科塔から

来るって言っつてたからもう少しかかるだろう」

「そんなに遠いのか？」

「約0.9kmだ。まあ気長に待とつや」

俺はそう言っつて、近くのベンチに腰掛け、上を見る。

木陰が涼しいな。

すると、隣に春風が座つた。

「薫、どうして寮に来なかつたの？」

「どっしどっしって・・・」

「そつだぞ。お前が居ねえから春風がさみ……」

雪弥が何か言おうとした瞬間、春風がボディーパーカーを食らわした。

「お、おい……」

「何でもないって、ねえ？ゆ・き・や！」

そつ言っている春風……怖エ……。

「あ……ああ……」

雪弥は苦しそつに腹を押さえて言う。

「そ、そつか。発言には気をつけろよ」

「そつする……」

「で、なんで校長の用意してくれたマンションに入らなかったの？」

「それは……、校長に迷惑をかけたくないからで……」

なんだか苦しい逃げ方だな……。

「ふ〜ん……。でも、薫のために一か所だけ部屋が空いてるんだけど……」

「ああ、あの部屋は後輩にでも使わせてやってくれ。俺はあそこに入る気は始めからないからな」

「わかった。でももし、来なくなったら、事前連絡してね。そんな時は部屋のあて、探すから」

「そんな時は頼むな」

そんな話をしていると、風宮達がやっと来た。

その後、いろいろな説明を聞いて、寮に戻った……………。

寮に帰り、俺は学ランを脱いで、段ボールに畳んで直した。

「もう…………使わないから……………」

俺はそう呟いて、私服に着替え、制服とズボンを洗濯機にかけ、寝室のベッドに倒れた。

武偵高の制服は明日には届くらしいしな…………。

あと、銃刀所持が校則で決まっっていて、俺は無難にベレッタM8000という銃とW2鋼という素材を使ったバタフライナイフを頼んだ。

てか、薬物を扱ううえで、火気は厳禁だ。

だから、銃には恐らく弾は込めない。

でも、そしたら意味ないか……。

俺はそう思いつつ、眠りに就いた……。

3弾 Medicine

翌日……

早くも小包として制服と銃刀が届いた。

銃刀には、ホルスターという装備のための収納アイテムが付いてきた。

俺は試しに制服を着て、武装してみる。

我ながら、様になっている事に驚いた……

ってこんなことしている場合じゃねえ。

俺は急いでスーツに着替えて、部屋を出た。

寮の下にはタクシーが停まっていた。

俺はそのタクシーに乗り込む。

そして俺を乗せたタクシーは走り出した。

今日は、青森まで里帰りだ。

どうやら、俺のことを星伽神社に紹介したらしい。

まあ、父さんと母さんは星伽の専属薬剤師だから……

後継ぎの俺を紹介したいのも無理は無いつか……。

しばらくして、タクシーは成田空港に到着した。

料金を払い、手ぶらで空港に入り、チケットを買って、機内に向かった。

俺はそこまで金持ちでもないため、エコノミーに座った。

それも格安で訳ありの奴をな……。

俺はそう思いつつ、外を眺めた。

成田空港から青森空港までは約2時間弱掛かる。

だから、それまでは暇なのである。

そういえば、里帰りするのって今回が初めてだ。

初めてというか、去年、日本唯一の薬物専門の学校である東京薬物専門高校に入学するために上京してきた。

だがその学校も一年経って廃校になった……。

何のために俺は東京に来たんだか……。

ハア……、下手したら帰って来いって言われるんだろうな……

。。。

嗚呼・・・、なんだかそう考えたら帰りたくなってきた・・・。

しかし、もう乗っちゃまった・・・。

あっち行ったら、恐らく迎えが来てるからエスケープ不可だろ。

あの二人・・・元気にしつつかない・・・

そして・・・青森空港に到着した。

手ぶらのため、荷物を取りに行くこともせず、出口を出た。

相変わらずつてところかな・・・。

俺はそう思いつつ、タクシー乗り場に向かった。

タクシー乗り場に着くと、がらくんとしていた。

「全然いねえし・・・。なんでだ・・・？しゃあねえ・・・、歩いて行ける所まで行くかな」

俺はそう呟いて、歩き出した。

まあ東京より少しだけ、自然が多いくらいだ。

俺はそう思いつつ、歩いていると、黒塗りのプリウス が目の前に
停まった。

「よっ、薫」

車の窓から顔を出して、言ってきた男性……。

俺の父さんである姫神 彰^{あき}である。

奥にはにっこりと微笑む女性……

俺の母さんである姫神 郁^{いく}である。

「なんで今なんだよ……」

「悪い悪い。ちょっと道が混んでてな」

「まあいいけど」

俺はそう言って、車に乗り込んだ。

「で、話は変わるけど、薬専高が廃校になったって本当？」

母さんは後ろを振り向いて俺に問いかけてくる。

「ああ。だけど、東京武偵高に新設された薬物科^{メデイシン}に全員移動になっ
た。だから、今まで
通りだって」

「それならいいんだけど……」

「そういえば、星伽家の長女が東京武偵高に居るらしい。まあ縁あったら仲良くしてくれよ」

「はいはい、縁があったらね」

俺はそう答えて、外を眺めた。

しばらく走ること、約40分……。

俺の実家に到着した。

俺は車から降りる。

「まあたった一年ぶりなんだからあまり変わっちゃいない」

まあそうなんだろうが、格式ある家にしかない風情がある。

単に古いだけだが……。

俺は久しぶりに、自分の部屋に戻った。

俺の部屋は漢方薬草の本などがたくさんある。

小さい頃からこういうのを教えられてたからな……。

俺は小さい頃に使っていたベッドに座り、漢方の本を読む。

その本は専門的な表示が言葉も入っている。

今でも分からないこともな……。

俺はこれ以上みていると目が回る為、本を閉じた。

生成方法と調合は、母さんから習っている。

薬草の見分け方も小さい頃から父さんから習っている。

その為、薬を作ろうと思えば作れる。

すると、ガチャツとドアが開いた。

「薫、そろそろ星伽神社に行きましょうか」

「わかった」

俺は母さんにそう返事をして立ちあがり部屋を出た。

家を出て、徒歩で星伽神社に向かう。

星伽神社は由緒正しい家柄であり、その専属薬剤師をしている父さんと母さんはとても優秀なのだと感じる。

感じるんだが……、母さんに至っては天然要素を感じる。

その辺を突っ込んだら母さんは泣くであろう……。

というわけで黙っておく。

しばらく自然に囲まれた道を歩くと、神社が姿を現した。

これがく星伽神社である。

星伽家は代々、緋の巫女・・・通称く緋巫女への血を引いている家系である。

そして、俺の家系である姫神家は星伽と並行して代々、薬草を基に薬剤を作ってきた家系である。

詳しいことはくひめがみけでんだいろく姫神家伝代録に書いてあるのだが、どうして星伽と関係を築いたかは記されて居なかった。

まあそんなことを知ったからといって、俺が姫神家の後継ぎになることは絶対である。

一人っ子ってのもなんか不便だな。

だって後継ぎが一人しか居ないんだからな。

ま、今さら嘆いたって何も変わらない。

俺はそう思いつつ、父さんと母さんの後をついて行く。

そして、神社の近くにある家に入る。

中に入り、応接間などところに連れられ、正座をして座った。

ここに初めて来たのは、8年前だ。

確かあの時は、母さんと父さんの付き添いで、薬を持って来た時だ。

俺がそんなことを考えていると、ふすまが開き、巫女姿の女性と少女が入って来た。

そして対面するように座った。

「さて、彼が彰の息子か？」

「はい。名を薫と言います」

俺は一礼をする。

そして、ある程度話を聞いて、俺は東京に帰った。

帰りついたのは、夕方4時半であった。

まあ、普通だろう。

あ、そういえば夕食を買ってなかったな……。

まあいいか……。

明日始業式だからな……。

それに、クラス編成の説明を聞きに行かないとな……。

そして翌日……

俺は朝8:00に武偵高制服に着替えて武装し、家を出て、武偵高に向かった。

学校に到着して、張り出されたクラス表を見る。

俺は2年A組……。

しかも……俺一人だけ……。

なんでだよ……。

「薰……一人なんだね。可愛いそうに……」

と背後から声がした……。

「春風、そういう方がぐさりと来るって……。それよりお前どのクラスだ？」

「私はC組だよ。雪弥と愛美も同じ」

「そうか。まあ俺はなれてっからいいんだけどな」

「まあお互いに頑張ろう。それじゃあね」

そう言って、春風は去って行った。

俺は教室に向かった。

時間帯的には、武偵高生徒がすでに登校している時間帯だ。

だから周りには元薬専高の奴らしか居ない。

そして教室の前に立つ。

すると横から小学生くらいの少女がやって来た。

放すこともないので無視しておく。

そして先生が少女の名であろう名と俺の名を呼んだ。

少女が入った後に、俺も続いた。

「彼女は強襲科アサルトの神崎・H・アリアちゃんです」

女教師がそういうと、一人の男子がずるりと椅子から滑り落ちた。

「遠山君、どうかしたの？」

女教師が滑り落ちた男子に問いかける。

「べ、別に……」

男子はそう答えた。

「それならいいんだけど……。そして、彼は今年から武偵高に新設された薬物科の姫メデイシン神 薫君です」

俺は一応、一礼した。

「それじゃあ席は……」

「先生、あたしあいつの隣がいい」

と神崎という少女がそう言った……。

すると、その男子の横に座っていた大男が立ちあがった。

「よ、よかったなキンジ。なんか知らんがお前にも春が来たみたいだぞ……!」

大男は男子の手を握りながらぶんぶん振る。

「先生！俺転入生さんと席代わりますよ……!」

「あらあら、最近の女子高生は積極的ねエ。それじゃあ変わってもらえるかしら?」

「ええもちろん!」

大男はそう言って、少女が俺が座るはずの席に座った。

少女はとことと男子のところまで歩いて行く。

そして、立ち止った。

「キンジ、これさっきベルト。返すわ」

べ、ベルト!?

まさかそんな関係なのか!?

「理子分かっちゃった!これ フラグばっきばきに立ってるよ!」

と窓際の少女が言いだした。

やっぱりそうなのか!

「キーくん、ベルトしてない!そしてそのベルトをツインテールさんが持ってた! これ謎でしょ

謎でしょ!??でも理子には推理できた!できちゃった! キーくんは彼女の前でベルトを取るような

何らかの行為をした!そして彼女の部屋にベルトを忘れて行

った!つまり二人は熱い熱い恋愛の真っ最中なのだよ

以外に武偵って大胆なんだな……。

俺はそう思った。

「キ、キンジがこんなカワイイ子といつの間に!」?

「影が薄いヤツだと思ってたのにッ」

「女子どころか他人に興味がなさそうなくせに裏でそんな事を!？」

「フケツ!！」

すると少女は太もものホロスターから銃を取り出し、撃った。

ズキューンという銃声が鳴り響いた。

怖ッ!！」

俺は二・三步下がった……。

「れ……恋愛なんてくだらない!！全員覚えておきなさい!！そんなことを言うヤツには…風穴あけるわよ!！」

神崎は顔を赤くして、そう叫んだ。

「ごめんなさいね。こういうのは日常茶飯事だからあまり気にしないでね」

と先生はにっこりとほほ笑んだ。

「あはは……」

気にしないってところが無理だ!！」

「まあ薫君は、窓際のあの席でいい?」

「ええ。別にかまいません」

俺は空いている席に座った。

後ろにはさつき迷推理をした少女の前である。

そして、午前の授業が終わり、俺は教務科マスターズと呼ばれる教科塔に来ていた。

まあなんていうか・・・、薬物科の担当教諭に書類を提出しに来たのだ。

本当は昨日の昼に提出する書類であったのだが、俺は実家に帰っていたので提出できなかったのである。

その為、今に至ったわけだ。

俺は教務科のドアをノックし開ける。

「メデイシン薬物科2年の姫神です」

俺がそういうと、真正面に居る白衣の下ぶち眼鏡の男性がキュウリを生噛りしながら手を振っている。

「こっちこっちィ〜」

と男性が言ったため、俺は男性に歩み寄った。

「これが書類です」

俺は書類を渡した。

「はいはい」

男性は書類を受け取って、眺める。

「はい、確かに受け取ったよ。あ、これは薬物科メデイシンの学科塔に入る為のカードキーね」

男性はそう言って、一枚のカードキーを渡してきた。

俺はそれを受け取る。

「そういえば自己紹介が遅れたね。僕は元薬物総合研究所教授の江川 浹。よろしくね」

「こちらこそよろしくお願いします」

俺はそう挨拶をして、教室に戻った。

そして、すべてが終わりに、俺は寮に戻った。

遠山という人は、男子の質問攻めからうまく逃げた。

俺はいくつか質問されたが、ほぼ遠山という人の方に行ったため、助かった。

だが、彼は不幸な人間だな……。

俺は寮の部屋に入り、ブレザーを脱いでソファに座って、テレビを点ける。

そして、横になり目を瞑る。

翌日・・・・・・・・

俺は知らないうちに寝てしまっていた……。

時計を見ると時刻は朝7:30を回っていた。

俺はゆっくりと準備をして、学校に向かった。

今日からは学科の授業が入ってくる。

やっと本来の授業ができるというものだ。

だが、トリクロルエチレンが搬入されているため、警戒はしておいたほうがいいだろうな……。

そして、午後の授業になり、俺達は薬物科の学科塔に白衣姿で入る。

俺は第一研究所第二研究室で、インフルエンザを殲滅する薬品開発部門にまわされた。

第一研究所第二研究室……

「先輩、このサンプルの結果は効果なしです」

そう一年の雨浪 隼しゅんが言った。

「そうか……。なら、そのサンプルは適正に処理してくれ」

「分かりました」

隼はそう返事をして、去って行った。

俺は電子顕微鏡で撮影されたPCのディスプレイを見ながら、インフルエンザウイルスの動きを観察する。

この研究室に居るのは俺と隼だけだ。

そもそも隼は、俺のパートナーだ。

薬物を扱うに当たり、パートナーは必須なのである。

いざ倒れたときかに助けが居なかったら困るからな。

だから、研究室に居る時は必ず2人で行動しなければならない。

「さてと、次はこの薬草を試してみるか……。隼、次のサンプ

ルを作るぞ」

「分かりました」

俺はインフルエンザウイルスを高濃度に抽出した液体をガラス皿に1滴垂らし、周りに薬草から抽出した液体を周りに流しこんだ。

「後は結果を待つだけだな……」

「そうですね」

「んじゃあ帰るか」

「え？もう帰るんですか？」

「ああ。根を詰めすぎたら事故につながるからな。無茶は禁物だ」

「そうですが……、他の研究室はまだ実験中ですよ」

「んなこと俺が知ったことか。他は他、うちはうちだ。それ以外の理由は無い」

俺はそう言っつて、白衣をロッカーにかけ、ブレザーを着る。

「……分かりました。また明日ですね」

「そうだ。まあ、明日は今日より倍以上のサンプルを用意するつもりだ。それで一気に済ませる。いいな？」

「はい、構いません」

「よし、じゃあ戸締りは俺がするから先に出ろ」

「分かりました」

隼はそう言って、即座に着替えて、帰って行った。

俺も戸締り、機械を確認して寮に帰った。

俺はこの時……、人生最大のバスジャックに遭遇するとは夢にも思わなかった……。

3弾 Medicine (後書き)

江川 浹 (20)

髪：銀髪のショートヘア

眼色：エメラルドグリーン

身長：167cm

所属：薬物科教諭

雨浪 隼 (15)

髪色：藍色のショートヘア

眼色：ダークブルー

身長：153cm

所属：薬物科

4弾 Despair

翌日、外は雨が降っていた……。

それも土砂降りだ。

だが、バスに乗ってしまえば、雨なんぞ関係ない。

俺は制服に着替え武装し、黒塗りのアタッシュケースを所持し、バス停に向かった。

そして丁度、朝7:58になりバスが来た。俺は一番後ろ側に座った。

ハア……、今日から徹夜になるな……。

俺は目を瞑った……。

しばらくバスに揺られていると、誰かの携帯が鳴った。

うるさいな……マナーモードは無いのかね……。

しかし、その電話を取り出した少女が脅えている。

一体何があったんだろうか……。

やけに騒がしくなってきた……。

「みんな、落ち着いて聞けよ……」

そう言ったのは、俺と同じクラスの大男、武藤剛気であった。

「このバスに爆弾が仕掛けられてやがる……」

武藤がそういうと、周りは脅え始める。

「落ち着け！とにかく片っ端から車内を探せ」

武藤がそういうと、座席の下や網棚の上を探し始めた。

俺は中央に立って、ただ見ているだけである。

たった爆弾如きでビビリすぎじゃないか？

「どうだ、見つかったか？」

武藤がそう呼びかけると、全員は首を横に振る。

「じゃあどこにあんだよ……！」

武藤はそう嘆く。

「恐らくこのケースの爆発物設置位置は車体下だろ……」

俺がそう呟くと、武藤が俺に歩み寄って来た。

「それは本当か!？」

「ああ。この手の爆弾処理は俺でもできる。問題は、走行中の車体

の下にどう潜り込むか……だな」

「速度だけは落とせねエぞ」

「仕方ない……、宙釣りでやるよ。だが装備が少ない……。問い合わせてるからその間までは速度を維持してくれ」

「分かった」

俺は携帯を取り出し、雪弥にかける。

『もしもし?』

「俺だ」

『ああ、薰か……。なんのようだ?』

「今、ケースCB3に遭遇した」

CB3……、それは薬専高で決められた暗号の一つ……。

CはClose<密室>。

BはBus<バス>。

3は車を3カットした状態で、前から1エリア、中央は2エリア、後方は3エリア。

つまり、密室で走行中のバス後方に爆弾が設置してあるという意で

ある。

『おいおいマジかよ!?!?』

「ああ。だから至急、解体装備とワイヤを用意して持ってきてくれ。場所はGPSで知らせる」

『了解!すぐに用意してそっちに搬送する!それまで爆はくんなよ!』

そう言つて、雪弥は通話を切つた。

さてと・・・

俺は生徒手帳に入れていた解体書を見る。

基本的には起爆コードを切断する方法が無難なのだが、今回の場合、速度感知起爆も兼ね備わっている

ため、スピードを落とせるようにするのが最優先だ。

だが、コードはケースによってカラーリングが変わっているため、間違えば、即時おさらばだ。

「姫神君、僕たちはどうすればいい?」

そう問いかけてきたのは、同じクラスの不知火であった。

「これと言つては無いが・・・、お前らはなんだかこのケースを知ってるのか?」

「まあね。実は最近武偵殺しの模倣犯と思われる犯行がこの前あつ

たばかりなんだ」

「武偵殺し・・・ねえ。まあ詳しいことは助かってから聞いわ」

しばらくして、車の音がする。

俺はふと、窓の外を覗くと、銃を備えたオープンカーが並走してくる。

すると、その銃は俺に銃口を向けてきた。

「伏せろ!!」

俺がそう叫ぶと、その瞬間、銃から無数の弾丸がバスの窓を貫く。

悲鳴が車内を包みこみ、数人の方を掠めた。

そして、銃弾は止んだ。

「行ったか？」

一人の男子が俺に問いかけてきた。

「いいや・・・、ロードノイズが消えねえ・・・。今も並走してやる」

俺は鞆の中から試験管に入った薬剤と布に包んであった錠剤を取り出し、混ぜて外に放り投げた。

その瞬間、銃の銃口が試験管の方に向いた。

咄嗟に俺は懐から銃を取り出し、オープンカーのタイヤを撃ちぬいた。

オープンカーは壁にぶつかり、炎上した。

そして、ヘリがバスの上を平進し、ヘリから神崎と遠山が頼んだ装備を持って車内に入って来た。

「みんな無事か!？」

遠山はそう問いかける。

「負傷者は居るけど、死者は辛うじて居ないよ」

「それならいいが・・・、この装備を頼んだのってのはお前か？」

「ああ。助かる」

俺はその装備を持って、屋根にワイヤの金具を撃ち込む。

「あたし達は何をすればいいの？」

神崎がそう問いかけてきた。

「援護してくれ。予定所要時間は約10分・・・。さっきみたいな車が来るかもしてん・・・」

「あのルノーね。わかったわ、でも、こっちが危険と判断したら戻りなさいよ」

「分かってる」

俺はそう言っつて、逆さになり、車体下を覗く。

やはり、ドデカイC4爆弾があつた。

俺は持つて来たミラーで四方八方を観察する。

コードは4本ある……。

内2本が速度感知だ。

俺はロングニツパを2本使つて、表面を少し削つて、電流を測る。

4本中2本が低電流であつた。

つまり、これが起爆である。

そして、高い奴が速度感知だ。

俺はその高い奴を+から切断し、-を切つた。

これで速度は関係なくなつた。

そして、起爆の方も切断した。

その後、バスを止め、爆弾を剥し、念のため、防爆ボックスに入れた。

後はこれを解析して成分を割り出し、入手経路を探れば何か犯人につながる手掛かりがあるかもしれない……。

俺がそう考えていると、神崎が俺に歩み寄って来た。

「アンタ、爆弾解体できるの？」

「一応爆弾も薬物を使ってるからな。ある程度の解体基礎は一年の時に学んだ。それに中学時代は……つて、話しても意味ないつか……。それじゃ俺はこの爆弾を薬物科学科塔第3研究所で成分解析にあたる。だから担任の先生にも連絡しておいてくれ」

「分かったわ」

俺は警察車両で学科塔に向かった。

第三研究所にたどり着き、俺は防撃服を着て防爆室に入る。

防爆室といっても、解体中に爆発したら俺は死ぬがな……。

俺は慎重にカバーを外し、薬品だけを引きぬいた。

これは結構高価な奴だぞ……。

ただの模倣犯がこんな品物を調達できるわけねエ……。

これは探りやすそうだ……。

俺はその薬物を扱っていると思われる会社に電話してみた。

80件中……該当者なし。

最近そんなものを購入している人は誰も居ないらしい……。

となると海外経由か……。

俺は薬連と呼ばれる組織に事情を説明し、聞いてみた。

そついう人物は居たらしいのだが、薬物販売法で規制されていて、

その薬物を同時購入したものは爆弾

作成未遂で全員刑務所に服役しているらしい。

「千里の道も一歩からというが……、一歩で靴ひもが千切れたじやねえか……。どうするか……。」

まあ今考えたところでどうにでもなるわけが無いので、一応、^{マスタ}教務科に報告書として提出しておくか。

俺は調べたことをすべてをまとめて、書類にした。

それを持って俺は教務科に向かった。

教務科に到着して、ドアをノックする。

「入っていいぞ〜」

という返事が聞えたので入る。

するとそこには待つていましたと言わんばかりに構えている女教師が居た。

彼女以外は誰も居ない……。

「今朝起きた武偵殺しのバスジャックで使用された爆弾の成分結果です」

「さ〜すが薬物科^{メデイシン}、調べが早いな〜。今でも鑑識科^{イデント}は調べてるって
いうのに〜」

「はあ……、それで薬物に薬品の入手経路は不明で、恐らく複数犯だと思えます。ですが、それでは模倣^{モボ}にしては悪質ではないかと」

「姫神イ〜、模倣犯は一人とは限らないぞ〜」

「そうかもしてませんが……」

「ま、この報告書は武偵局にも回してみる。まあ大した結果は期待

できないが……」

「それでは、私は寮に戻ります」

「授業は受けないのか？」

「今さら行ったところで、もう遅いですし……」

すると、チャイムが鳴った。

「そうみたいだな。まあ、何か分かったら一応連絡する」

「分かりました」

俺はそう言って、職員室を後にした。

そして、寮に帰り俺は、すぐに眠りに着いた。

しばらく寝ていると、チャイムが鳴った。

「誰だよ……」

俺は渋々ベッドから起き上がり、玄関に向かった。

チャイムは連続的に押され、最終的には一定音に聞えるようになった。

「はいはいわかったから・・・」

俺はそう呟きながら、ドアを開けた。

そこには神崎と遠山が立っていた。

「なんだよ？お二人さん・・・」

「アンタが帰ったって聞いたから直接会いに来たのよ。それより、あの爆弾のことなんだけど・・・」

「ああ、あれね。データはこっちに転送している、まあ中に入ってくれ」

俺は二人を部屋の中に招いた。

「お邪魔するわよ」

と言って、神崎と遠山は入って来た。

「まあ適当に座ってくれ」

俺はそう言って、寝室に置いてあるノートパソコンを持って、リビングに戻り、起ち上げる。

そして、研究室からPCに送った解析結果を開く。

「これが、今回使われた爆弾の成分表だ」

俺は成分表を見せながら言う。

「種類はC4爆弾の成分と一致する」

「武偵殺しの十八番よ」

「やっぱり今回のも武偵殺しの仕業か」

「ええ・・・」

「神崎、俺はこの爆弾の入手ルートは探れなかった。だが、お前なら何か心当たりがあるんじゃないか？」

俺がそう問いかけると、神崎は俺の目を一身に見てきた。

「恐らく、イ・ウーが関係してるわ」

「イ・ウー？なんだそれ・・・」

「アンタは知らなくていいのよ。それより、アンタは爆弾とか解体できるのね。薬物科メデイシンと違って馬鹿にしてたわ・・・」

「俺達は爆弾の作成から、解体までを習うからな」

「薬物科が爆弾解体を？どう関係あんのよ？」

「爆弾には薬物を使っているからな・・・」

「まさかとは思つが・・・お前達が模倣犯じゃないだろうな?」

遠山は疑いの目で俺を見てきた。

「んなわけあるか・・・。俺はそろそろ寝る。帰ってくれ」

「わかったわ。もしまた何か分かったら連絡して」

お前の携番&メアドは知りませんよ。

「何か分かったらな」

俺はそう言って、寢室に入り眠りに着いた。

翌日・・・

午前をいつものように授業を受ける。

しかし・・・つまらん・・・。

さすが偏差値が低いだけはある。

俺達元薬専高が一年の初めに習ったところを今さらやっている。。。

進行が遅すぎじゃねえか。。。。。

俺は欠伸を堪えるように、口を手で押さえる。

正直……眠い……。

そして、眠気に何とか勝った俺は、休み時間に寝ることにした。

次の時間は体育である……。

俺は見学するがな。

薬専高では体力づくりのために、50?の重りの入ったボックスを背負って山を登った経験がある……。

それ以外に運動なんてしたことはない……。

するとそこへ神崎がやってきて、横に座った。

「何体育サボってるのよ」

「サボってるわけじゃねえよ……」

「なら何してるって言うの?」

「考え事……というかあの爆弾についてだ」

「武偵殺しの爆弾のこと?」

「ああ。今は設計図が無いから分かりにくいだろうが……、ありやプラスチック爆弾の中で威力が最

大のものだ」

「そんなに威力が強いのか!?」

「ああ。アレだったらあのバスはおろか、学園島ごと消せる威力がある」

「でもどうしてそんなモノをあのバスに?もし仮に、武偵以外の一般人まで巻き込むつもりなら学園島行きは選ばないでしょ?」

「これはあくまで俺の仮説だが、薬専高の生徒も狙われていたとしたら……」

「ちょっと!それどういうこと!?もしそれが本当なら……」

「ああ……」

「それならアンタも無関係じゃないわね……」

「俺も協力させてもらう。いいだろ?」

「ええ、構わないわ。ねえ、明日暇?」

「あ、ああ……。特に予定はない」

「そう。なら明日付き合いなさい」

「どーだよ……?」

「明日になれば分かるわ」

「わかった……」

翌日……

俺は念のため、クロロホルムを装備し、部屋を出て、新宿駅に向かった。

新宿駅で待っていると、そこに神崎がやって来た。

「早いわね。まあいいわ、ついて来て」

アリアはそう言った。

俺は神崎の後をついて行く。

しばらくして、新宿警察署に到着した。

「ここになんの用があるんだ？」

「ついてくればわかるわ。それより……、隠れてないで出てきなさい……」

誰か尾行してたのか！？

俺は慌てて振り向く。

そこには、遠山が立っていた……。

なんでお前が居るんだ……。

「気づいてたんなら言えよ……」

遠山はそう神崎に言った。

「迷ってたのよ……。アンタも武偵殺しの被害者だから……」

「ならどうしてそいつは直で連れて着てんだよ？」

「薫はこの件で、ある仮説をあたしに教えてくれたわ。その仮説が本当なら、薫は完全に被害者よ」

「仮説？なんだよそれ……」

「武偵なら自分で考えなさい」

神崎はそう言って、警察署に向かって歩き始めた。

俺も神崎に続いて歩き始めた。

遠山もついてくる。

そして、面会室に入る。

「神崎、今から誰に会うんだ？」

しかし、神崎は答えなかった。

「遠山、お前は神崎の横に座れ」

俺は遠山に近づき、耳元でそう言った。

「なんでだよ？」

「こんな時、俺はどんな対応をすればいいか分からん……」

「俺だって苦手だったの……」

遠山はそういつつも、神崎の横に座った。

俺は壁にもたれかかる形で立った。

しばらく待っていると、まだ20代前半ぐらいの女性がアクリル板の向こうの部屋に連れられてきた。

「ママ！」

俺は神崎の言った言葉に度肝を抜かれた。

遠山も驚いた様子だ……。

「あああら、男の子を二人を連れてくるなんて……、どちらが彼氏さん？」

「か、彼氏なんかじゃないわよ！こいつは遠山キンジ、あっちに立

つてるのは姫神薫……。どっちも武
偵殺しの被害者よ」

「そう……。はじめまして、神崎かなえといいます。ちょっと危
なっかしいけど、仲良くしてあげて」

「な、何言ってるのよ！それより本題に入るわ。実は薫が起てた仮
説には、薬専高の生徒も狙われている
んじゃないっかって考えているの。だから、その線も考慮して調べ
て行けば犯人に行きあたると思うわ」

「アリア、それはあくまでも仮説でしょ？暗中模索の状態で動いて、
アリアが危険な目に遭うかもしれないわ
いわ」

「でもママの冤罪を晴らすには……」

「神崎、時間だ」

監視がそう言っつて、かなえさんの腕を掴み連れて行くこととする。

「止める！！ママに乱暴するな！！放せ！！」

「アリア！今のあなたではイウーに勝てないわ！まずはパートナー
を見つけないさい！曾お爺様にも優秀なパ
ートナーが居たわ！アリアも信頼できるパートナーを見つけないさい
！」

かなえさんはそう言い残して、連れて行かれた。

面会時間・・・3分49秒・・・。

重犯者の面会可能時間だ・・・。

そんなに悪いことをしたようには見えなかったが・・・。

確か神崎は冤罪って・・・。

神崎はその場から立てなさそうなくらいに頂垂れていた。

「許さない・・・。あんな扱いをしていいわけない・・・。」

神崎はそう呟いた。

「帰ろう。こんなところに居たってなにも始まらない・・・。」

俺はそういって、ドアを開けて外に出た。

すると、受付に俺の知っている刑事が居た。

公安0課の沖田総司・・・。

ちなみに公安0課とは、<殺しのライセンス>を持つ刑事で、彼らには人を殺める権限がある。

俺は沖田さんと目があつた。

「あ、姫神君。こんなところでなにをしているんだい？」

「ちょっと用事がありまして・・・。」

「まさか悪いことしたわけじゃないよね？」

そう問いかけてきた沖田さんの目は、殺気に満ち溢れていた。

「そんなことしませんって！てかしたら即あなた方の標的になるじゃないですか！！」

「当たり前だよ。なんせ薬専高生は下手したら殺人者になりかねないからね」

「そ、それより沖田さんはどうしたんですか？」

俺がそう問いかけると、沖田さんは周りを気にしている様に困った。

「ごじや話せないんですね」

「まあね。これは私達にとっても失態だからね」

「そうですか……、詳しいことは探りませんが、お気をつけて」

「そうするよ。それじゃあ、またね」

沖田さんはそう言って、警察署を出て行った。

沖田さん達が自ら失態と言っている山って一体何なんだ？

しかし、深く探ると逆に殺されるから止そう……。

俺がそう思いつつ、外に出ると、雨が降っていた。

「来る時は晴れてたのにな……」

すると、神崎は雨の中歩いて行ってしまふ。

遠山は神崎の後について行く。

仕方ねえか……。

俺も二人の後をついて行く。

雨の中、人通りは少ない。

もうすでにずぶ濡れだ……。

「神崎、お前が警察の奴らを訴えたい気持ちは分かる。でもな、お前がそう言ったところで無罪にならねえぞ」

俺がそういうと、神崎は立ち止った。

「アンタに何が分かるのよ……？あたしの気も知らないで知ったようなこと言わないで！」

俺は神崎の言ったことに苛立ちを感じた。

「……わかった。もうお前に関わらない」

俺はそう言って、その場を去った。

この状態でタクシーに乗ることも、バスに乗ることも、地下鉄に乗ることも、モノレールにも乗れない
だろ……。

仕方ない……。

歩いて帰ろう……。

俺は歩いて寮まで帰った。

翌日、俺は部屋に居た。

昨日のことで神崎に会うのが嫌だったからだ。

俺はベッドに寝転び、目を閉じる。

すると、携帯にメールが届いた。

俺は携帯を手に取り、メールを開く。

知らないアドレスだが、題名に遠山と書いていたのですぐに分かった。

<昨日のあれは言い過ぎだぞ。ちゃんと謝った方がいい。それから、
アリアは今日、ロンドンに帰るらしい>

と書いてあっただけだ。

謝るのは嫌だからその部分だけは無視しておく。

が、少し気になったのが、最後の文……。

神崎がロンドンに帰るといふ文……。

「俺にどう関係あんだよ……」

俺は返信もしないで携帯を閉じ、眠りについた。

プルルル……プルルル……と携帯が鳴る。

今回はメールじゃない……。

俺は寝ぼけながら電話に出た。

「はい？もしもし」

『姫神薫、君は大切な仲間を失うことになる』

そついった相手は、変声機を使っていた。

明らかに怪しい……。

それに大切な仲間って……？

「どういう意味だ？」

『そのままの意味だ。神崎・H・アリアをチャーター機ごと消し去る』

一瞬、その意味が全く呑み込めなかった……。

神崎を殺す？

コイツは一体何を言っているんだ？

「もし仮にそれが本当なら、何故俺が関係する？」

『今回は君も関わり深い者が犯人だ』

「どういうことだ！？ 答えろ！」

『すべてを知りたかつたら午後6時47分発のロンドン行き、チャーター機AM A 600便に乗るといい。

君の出番も用意してある』

「意味がわかんねえよ！！大体お前は・・・！」

俺が問いかけようとした時、電話が切れた。

「くそッ！」

俺は時計を見る。

時刻は夕方5時半・・・。

今から行けば余裕で到着する。

「行くしかねえか・・・」

俺はそう呟き、クローゼットに収納していた布に包まれたモノを2つ取り出す。

布を解き、それを手に取る。

それはリボルバーと呼ばれる銃・・・。

S & amp ; W M 5 0 0 (8 インチモデル) と S & amp ; W
M 6 8 6 (4 インチモデル) である・・・。

「中学以来だな・・・」

俺は武偵高制服に着替え、懐に付けたホルスターに M 6 8 6 を装備し、腰に付けたホルスターに M 5 0 0 を装備した。

どちらも・500S&Wを装填してある。

「よし……行くか」

俺はタクシーを呼び、空港に向かった。

空港に到着し、俺はA M Aのカウンターに向かった。

やはりチャーター機に乗る為にはチケットが必要だろう。

「すみません、A M A 6 0 0便の空席はありますか？」

「少々お待ちください」

受付嬢はそう言って、調べ始めた。

「残念ながら、空席はございません」

おいおいウソだろ……。

空席が無いんじゃ入れねえじゃねえか！

俺は少しいららし始めた。

しかし、あの時、相手が言っていた……。

<君の出番も用意してある>と……。

もしかしたら……。

「それでは、姫神薫の名で予約はしていませんか？」

受付が調べた。

「ええ、ございますよ」

やっぱりか……。

「実は私、こういうものです」

と俺はブレザーの胸ポケットから武偵高生徒手帳を取り出し見せる。

「あなたが姫神様でございますか？それでしたら、こちらを……」

受付はチケットを取り出し、渡してきた。

「昨日、直接ご予約を頂いていましたので、予約しに来た方が姫神様かと思っておりましたが……、代理でいらしたんですね」

代理……、恐らく電話の相手だろう……。

「まあそんなところです」

「それでは、ごゆっくりとお寛ぎ下さい」

受付は軽く会釈をした。

俺は搭乗口に向かい、機内に乗り込んだ。

俺の部屋はF ?号室である。

中に入ると、テーブルに赤ワインが置いてあり、俺宛の手紙も添えられていた。

その手紙を開いてみる。

<ようこそ、姫神君。ここでは本気を出さないと殺られるから気をつけたまえ>

とだけ書かれていた。

なんで俺の本気を知ってた……!?

コイツ……俺のこと調べてやがる……。

すると、機内放送が流れ、俺は座席に座り、シートベルトをつける。

夕方6時49分、機体は離陸した。

シートベルトサインが消え、俺はテーブルに武装をすべて並べる。

右からM500、M686、.500S&W弾×60発、
バタフライナイフ、防弾グローブ……。

俺は防弾グローブを装着し、M500とM686をホルスターに戻

し、弾をリボルセットというリボルバー専用のリローダーに5発と6発を腰のリローダーホルスターに容れる。

後はこの機体が、何もなく目的地に到着することを祈るだけだ。

しかし、離陸してすぐに、積雷雲の近くを飛んでいた。

<ただ今、積雷雲の側を飛行中です。多少揺れますが、飛行に影響はございません>

という放送が流れた。

この機体を操縦してる飛行士は、下手だな……。

すると、銃声が鳴り響く。

それもマグナム弾を放った時と同じ音が……。

行くか……。

俺はM686を装備して、ドアをゆっくりと開ける。

そこには、先に出ていた遠山と神崎が、乗務員に銃を向けていた。

「Attention please でやがります」

乗務員はそう言って、催涙弾の様なモノを取り出し、投げた。
客は部屋に逃げ込む。

しかし……これはダメーだ！

俺は銃を構え、乗務員にめがけて撃った。

しかし、数ミリのところで外れた。

「チツ！逃がしたか……」

俺は歩いて、神崎と遠山が逃げ入った部屋をノックし、開ける。

すると、遠山が銃を構えてこっちに睨みを利かせてきた。

「待て、俺だ」

「姫神！！なんでお前が……？」

「ちよいとあいつに用があつてな」

俺はそう言って、神崎に視線を移す。

しかし、神崎は目を反らした。

「遠山、ついて来い。この機体に爆弾が仕掛けてある」

俺がそういうと、遠山と神崎は驚いた表情をする。

「どづいつことだ！？爆弾って・・・」

「実は俺の携帯に電話があつて、この機体ごと神崎を消し去ると言つていた。恐らく、爆弾で爆破する
つてことだろう。ところで、お前はどづいつここに居る？」

「この際だから、お前にも教えておく。実は去年の武偵殺しは、バイクジャック、カージャック、シージャックという順に、標的が小さいものから大きいものへと変わっている。が、ここで一度、標的は小さくなる。チャリジャック、バスジャック・・・そしてこのハイジャック・・・。だが、去年のシージャックでは一人の武偵が殺された・・・。バイクジャックでも、カージャックでも被害者は居なかつたのに・・・。そして、流れが一緒なら・・・。」

「ハイジャックで一人狙われる・・・ということか」

俺がそう続けると、遠山は頷いた。

「その標的がアリアだ」

それはどうか・・・？

すると和文モールス信号の音が流れだす。

<オイデ オイデ イウー ハ テンゴクダヨ オイデ オイデ
ワタシハ イツカイノ バー 二
イルヨ >

「誘つてやがる・・・。」

「行くしかないでしょ」

神崎は立ち上がり、白銀と漆黒のガバメントを取り出した。

俺はM686を構えながら外に出た。

そして、一階のバーに向かう。

「薫、なんでアンタがここに来たの・・・？下手したらアンタまで死ぬのよ・・・」

神崎は俯いた表情で問いかけてきた。

「電話の相手にムカついた・・・。それに、俺と関わり深い奴が犯人らしい。そう言われちゃ、黙っておけなくてな」

「そう・・・」

神崎はそう言って黙った。

そして、バーにたどり着くと、客室乗務員がカウンター席に座っていた。

「今回もまんまと引っ掛かってくれやがりましたね」

そういって、乗務員は立ち上がった。

俺は乗務員に銃口を向ける。

「動くな。動いたら撃つ！」

「出来るもんならやって見やがれです!!」

乗務員がそう言った瞬間、背後に気配を感じた為振り向くと、仮面をした男が日本刀を振り上げていた。

俺はM686で受け止める。

「相変わらずだな・・・、薫は!!」

男はそう言っつて、さらに力を込めてくる。

この力・・・、昔経験がある・・・。

「姫野・・・なのか・・・？」

俺がそう問いかけると、男は乗務員のところまで宙返りをした。

「久しぶりだな、薫。元気そうじゃないか」

「姫野!!どうしてお前がこんなことをする!?!」

俺は感情的になっているのかもしれない・・・。

だが、感情を抑えることができないのだ・・・。

「薫、あいつのこと知ってるの!？」

「あいつは姫野 愁^{しゅう}……。元青森武偵中ランクSの武偵だった奴だ……」

「ノンノン、彼は今もランクSの実力だよ、姫神君」

乗務員はそう言って、マスクを外した。

もちろん、姫野も仮面を取った。

「理子!!」

神崎と遠山は驚いている。

「どうしてお前達が……」

俺がそう問いかけると、姫野はニヤリと笑った。

「それが、もう一人いるんだよね、これが……」

「もう一人……だと!？」

「それっじゃあ登場してもらいましょー!元爆弾魔こと矢橋 洸^{こう}」

俺はその名を聞いて驚いた……。

すると後ろから、黒いコートを着た少年が、俺の横を不気味に通り過ぎ、理子達のところに立った。

「わざわざ紹介するな・・・、リュパン」

「その名で呼ぶんじゃないよ、洗」

峰は男の様な口調となった。

俺より驚いたのが、矢橋が居ることだ・・・。

。。
歴史上、最も残忍で、邪悪な爆弾魔である矢橋が居ることが・・・。

4弾 Despair (後書き)

姫野 愁 (17)

髪：濃い藍色でエル・ワトソンのような髪型

眼色：ダークブルー

身長170cm

愛用の武器は日本刀で、銃はコルト キングコブラを使用。

矢橋 洸 (15)

髪型：漆黒で武藤の様な髪形

眼色：ブラウン

身長：157cm

武装こそしていないが、爆弾を作る為の装備は整っている。

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になるうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連に横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能^{たんのう}してください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n4352z/>

緋弾のエリア～薬物科の武偵～

2011年12月26日01時49分発行